

天文民俗調査報告(2015年)

北尾 浩一*

概要

2009年より天文民俗調査報告を開始してから7年目となった。調査は年々厳しくなっていくが、日々の暮らしのなかで形成された日本古来の伝統的な星名伝承を記録することができた。主な成果は次の通りである。

- ・新潟県糸魚川市において、デンクロウボシ(伝九郎星)を記録することができた。
- ・大阪府堺市においても星名伝承を記録することができた。

2015年においても新たな発見があり、さらには都市部においても天文民俗調査が実施可能であることが明らかになった。

1. はじめに

1978年、新潟県佐渡郡相川町姫津(現 佐渡市)より星の伝承の調査をはじめから38年目になった。調査を実施した地域は、「北陸」「近畿」「四国」である。

2. 調査の概要

2-1. 調査方法

漁業に従事した経験を持つ高齢者(おおむね昭和15年以前の生年)を中心にインタビュー調査を行なった。最も高齢の伝承者は大正14年生まれ、最も若い伝承者は昭和22年生まれであった。なお、星名とともに年中行事(七夕等)についても調査対象とした。

2-2. 調査地

2015年は、次の13箇所で見名伝承の記録を行なうことができた。

- ・3月…大阪府堺市堺区大浜北町、出島、高石市高師浜、泉南郡岬町多奈川小島
- ・9月…愛媛県伊予市下灘、上灘、伊予郡松前町、兵庫県明石市二見町西二見、加古郡播磨町古宮
- ・10月…新潟県糸魚川市筒石、能生、富山県黒部市生地、下新川郡朝日町宮崎

3. 各地域の星名伝承

2015年に各地域で記録した星名伝承の概要は、次のとおりである。

3-1. 北陸

新潟県、富山県の調査を実施した。

(1) 新潟県糸魚川市筒石

話者(昭和10年生まれ)は、小学校2年のときから船に乗った。学校から早く帰ってこい、漁師は学校に行く必要ない、と言われた。話者に次のように確認しながら星の思い出を聞いた。

北尾「三つ並んだ星とか漁師さんの言葉でなんて言っていたのですか」

話者「その星は、デンクロウボシと言ったのですね。デンクロウ(伝九郎)いう家(うち)があった。そのほうから来ているらしいです」

北尾「人の名前ですか」

話者「屋号ですね。それとなんか関係あるらしいんですけどね」

星の並びについては、記憶違いがあるかもしれないので繰り返して確認する。

北尾「三つ並んでいたのですか」

話者「はい」

北尾「縦か横に」

話者「ん… そのときのあれによって、縦になったり横になったり」

縦に並んで見えるときと横に並んで見えるときがあると記憶をたどりはじめた。最近では星を見ることはないの

*中之島科学研究所
kitao@kagaku-shinko.org

だろうか…

北尾「いまも見えるのですか」

話者「星はいまも見えますよ」

北尾「デングロウボシも？」

話者「はいはい、見えますよ。いまなんと言うんかな」

北尾「デングロウボシって、こんな3つの星が並んで？

(絵を見せながら)」

話者「はい。縦になったり、横になったり、時季によって」

ノートに三つ星の図を書いて確認すると、季節によって縦に並んで見えたり、横に見えたと記憶をたどりはじめた。しかし、夏の朝、東の空に縦に並んでのぼってくるというように具体的な時期、位置の記憶をたどれない。三つ並んだ星には、オリオン座三つ星以外にさそり座アンタレスと $\sigma \cdot \tau$ 、わし座アルタイルと $\beta \cdot \gamma$ があるので念のため確認をする。

北尾「三つの星、同じ明るさくらいで？」

話者「そうですね」

北尾「同じ間隔にのぼってくるのですか」

話者「あー、そうそう」

三つの星がほぼ同じ明るさで、同じ間隔という、オリオン座三つ星である。

デングロウボシの見える方向を実際の空で確認しようと思い、「デングロウボシってあっちのほうにあるのですね」と東のほうを指さすと、「うちはこっち」という答えがかえってきた。伝九郎という屋号の家は集落の西のほうにあった。

(2) 新潟県糸魚川市能生

七夕の御輿について伝えられていた。

「タナバタサンのことを祇園さんと言った。京都の祇園さん。御輿を中学生くらいがかついで子どもがついて歩く。町中、七夕。終わったらお菓子くれた」

(話者生年、昭和12年)

(3) 富山県下新川郡朝日町宮崎

チカボシとヨアケノミツボシについて記録することができた。

「3日前に、チカボシいうて、お月さんに大きな星が接近するという現象があるわけ。ああいうことになると、しけが近いとか…」(話者生年、昭和14年)

3日前の10月10日は木星と、4日前の10月9日は金星と月が接近してチカボシ(近星)であった。

「ヨアケノミツボシ、夜明けにのぼってくる。出たら夜明けが近い」(話者生年、昭和元年)

夏の夜明けのオリオン座三つ星をヨアケノミツボシと呼んだ。

3-2. 近畿

大阪府、兵庫県の調査を実施した。

(1) 大阪府堺市堺区大浜北町

エビ、アナゴ等の夜の漁で、ヨアケノオオボシ(明けの明星)、ナナツボシ(北斗七星)、ミツボシ(オリオン座三つ星)を目標にした。

「朝、大きな星、出る。ヨアサだよ。帰ろうか、と言った。魚市場に魚を売らなあかん。ヨアケノオオボシ、東に山の上に大きな星」

「ヨアケノオオボシ、エビとついているとき、網あけて帰るか」

「ナナツボシ、いまごろ日が暮れたらナナツボシ、頭の上のほう。ナナツボシは、いがんだ星」

「ミツボシ、いま見える」(話者生年、昭和10年)

(2) 大阪府堺市堺区出島

星ばかり見ていた明治生まれの人が語っていた星名のなかでオオボシ(明けの明星)だけ記憶をたどることができた。

「星見てな。エビジャコとる網だったら、あかなったら、入ってこない。夜さ(よさ)ばかり出るやろ。そしたら、オオボシが山こえてあがってくるから、それ上がってきたら、もう夜明けてくるや。帰らなあかん言うて」

「オオボシ、みんな見とるんちがうかいな。時計ないやろ。朝、3時か4時、上がりかけたらわかるやん」

(話者生年、大正14年)

(3) 大阪府高石市高師浜

夏の明け方、東の空に見える2つの星をヨアケノオオボシ、あるいは単にオオボシと呼んでいた。

「オオボシ、東の空に2つ。ヨアケノオオボシ。明るい、縦に2つ。オオボシが出ると、しらんで東がじーとあかるってくる。青色。ヨアケノオオボシ、あの星みえてきたら、夜明けてくるんだ」(話者生年、昭和22年)

2つなので明けの明星ではない。青色ということから、リゲルとシリウスの可能性もあるが、今後の課題である。

(4) 兵庫県明石市二見町西二見

話者(昭和15年生まれ)に、夜明けの星について尋ねると、「あーあー、金星やね」という答えが返ってきた。年寄りはどうに呼んでいたか確認すると、「オオボシと呼んでいた。昔はオオボシ」と説明してくださった。スマルについては、「蛸壺をやっていたとき、スマルで探した」と、漁具スマルについて記憶をたどることができたものの、スマルという星は伝えていなかった。

(5) 兵庫県加古郡播磨町古宮

話者(昭和17年生まれ)に、「夜明けに大きな星がきょうも朝、見えていましたね」と尋ねると、「オオボシいう」という答えが返ってきた。明けの明星以外は伝えていなかった。

3-3. 四国

愛媛県中予地方の調査を実施した。

(1) 愛媛県伊予市下灘

サカマス(酒榼、オリオン座三つ星と小三つ星とη星)、スマル(プレアデス星団)が伝えられていた。

「いろいろあらあよ。星はいろいろあるけど見なんだからわからん。サカマス、あらあらあ、いまごろこれくらいでなあ。朝、これくらいまであがったら夜が明ける。これくらいまであがったらな」

「サカマスって言って…。いろいろあらあ。そのさきには、スマルいうて、またかたまりがでるのよね。そのなにかちがうのよ」(話者生年、昭和8年)

9月4日に調査を実施したが、その頃の明け方のサカマスがこれくらいあがったら夜が明けると身振り手振りで教えてくれた。

(2) 愛媛県伊予市下灘

スマルという名前を聞いていたものの、注意して観察した経験はなかった。

「スマル、どのような星か知らないが、よく年寄りが言っていた。スマル、あれがこっちきたら何時とか、漁があるとか、潮がどうなるとか言った」(話者生年、昭和20年)

(3) 愛媛県伊予市上灘

漁具スマルについて記憶をたどることができたものの、星名は伝えていなかった。単に「ほしさん」と言っていた。

「星の名前はなし。ほしさん、と言う。大きな星、ひかりがちがう」

「スマルという釣り道具はあったが、星のスマルはなかった」

「きまった星でる。きまった星、ほしさんという」

(話者生年、昭和9年)

(4) 愛媛県伊予郡松前町

アケノホシ(明けの明星)、ミツボシ(オリオン座三つ星)が伝承されていた。

「アケノホシ、大きい。はっきり見える、大きな星」

「ミツボシ。ななめに並んで。ミツボシ、明るい。3つおなじ間隔で」(話者生年、昭和11年)

4. 特筆すべき星名伝承

4-1. 人名にもとづく星名

日々の暮らしと星空を重ね合わせて、特徴のある配列に、生活用具、衣食住のなかでの様々な営み等を描いた。だから、星名は、日々繰り返される「食べる、飲む(食生活)」「身につける(衣生活)」「住む(住生活)」「遊ぶ」「祈る(信仰)」「生産する(つくる、とる)(農業・漁業・製糸および機織り・山樵・狩猟等の生業)」などの暮らしの様々な場面としっかりと結びついていった。例えば、愛媛県伊予市下灘で記録したサカマスは、毎日の食生活で使用する酒榼を星空に描いたものである。

星空にも自分たちと同じような暮らしがあると信じた。ときには、星を擬人化して、「オヒトンタア(お人達)」と

か、明るい星を「大きい人」と呼んだこともあった。また、特定の人物の名前で呼んだこともあった。

新潟県糸魚川市筒石で記録したデンクロウボシ(伝九郎星)は、地域の屋号であった。人名にもとづく星名には、次のようにデンクロウボシをはじめとする「地域の人名や屋号」と「地域を越えて活躍した有名人」であるケースがある。

① 地域の人名や屋号

・デンクロウボシ(新潟県糸魚川市筒石)

オリオン座三つ星。筒石の屋号にもとづく星名。

・ケンキチボシ(鹿児島県出水郡長島町獅子島弊串)

宵の明星。夕方暗くなって宵の明星が出るまで働くケンキチという天草から来た人にもとづく星名。天草から来たのは昭和10～11年からであり、比較的新しく形成された星名。2004年11月、昭和3年生まれの話者から聞いた話である。

「ケンキチというのは、私たちの小学校時代から17、8くらいにいた人。その人ががんばりする人間。きばる人間、その人の名前をとってケンキチボシ。ケンキチは星の出るまで働く。ケンキチボシは夕方暗くならないと見えない。夕方暗くなって見えるときまできばった」

「ケンキチさんが天草から来て、前島を買って、弊串の個人の人が持っていたのを、ケンキチさんが買うて。そこに住んで、山の手入れをした。杉とか檜の木の手入れをした。山仕事がんばって、夕方、ケンキチボシが出るまで手入れしていたので、かざらも切ってなかった」

・ゼンタロウボシ(愛媛県西宇和郡三崎町(現 伊方町))

宵の明星。ゼンタロウという人が宵の明星の出るまで仕事をしてきたことから、ゼンタロウボシと呼んだ。

「ゼンタロウボシというのがあった。その星が出るまで山におった。仕事していた」(1983年10月、76歳のおばあさんから聞いた話)

・デンゾウボシ(鹿児島県川辺郡坊津町坊(現 南さつま市))

明けの明星。デンゾウという昔の漁師が星の名前になった。

「デンゾウという人がいて、金星と間違えて木星を見て金星と言った。それで金星をデンゾウボシと言った」(1980年1月、明治43年生まれの話者さんから聞いた話)

・ダイケノアーヤブシ(沖縄県八重山郡竹富町鳩間島)

宵の明星。ダイケ(大工)は人の名前、アーヤは父親のこと。大工という人が日が暮れて宵の明星が明るく輝くまで畑仕事をして帰ったことからダイケノアーヤブシ。

・サンニョンボシ(鹿児島県川邊郡枕崎町西村(現 枕

崎市))

宵の明星。酒好きの人の名前サンニョンにもとづく。「日没後に出て午後九時頃かくれる一箇の大星を云ふ。昔サンニョンという者が頗る酒好きで、常に日が暮れると飲みだし、この星の没する九時頃には漸く止めたので、人が名付けてこれをサンニョン星と云ふ」(内田 1949)

・サンリンボシ(鹿児島県川邊郡枕崎町枕崎(現 枕崎市))

明けの明星。夜が明けるまで酒を飲んだ人の名前サンリンにもとづく。

「昔サンリンと云ふ人が夜中酒を飲んでゐて、夜が明けこの星が出たので逃げ歸つた」(内田 1949)

・ミキョウボウスブシ(三京坊主星)(鹿児島県大島郡徳之島町)

明けの明星。高僧の名前にもとづく。

「その昔、三京(みきょう)というところに住んでいた高僧三京坊主様が死んだとき、その目玉が天に上がって星になったからだという。三京という場所は徳之島の中央部山間に位置する小集落で、古く三京坊主ガナンという高僧が住んでいたという伝承がある。いまでも立派な座禅を組んだ石像が残っている」(徳之島の松山光秀氏よりの手紙(1987年)による)

②地域を越えて活躍した有名人

・トクゾウボシ(徳蔵星)(大阪府泉佐野市)

北極星(こぐま座 α 星)。北極星の動きを発見する物語に登場する名船頭「徳蔵」にもとづく。(北尾 2001)

・オナガワボシ(小野川星)(静岡県榛原郡相良町地代(現 牧之原市))

さそり座 $\mu_1\mu_2$ 。相撲の名力士小野川にもとづく。(内田 1949)

・ゴロージューロー(五郎十郎)(静岡県榛原郡相良町地代(現 牧之原市)、小笠郡相草村赤土(現 菊川市))

さそり座 $\lambda\upsilon$ 。曾我兄弟の兄、曾我十郎(曾我祐成)、弟、曾我五郎(曾我時致)にもとづく。(内田 1949)

・ソガボシ(曾我星、静岡県榛原郡御前崎村大山(現 御前崎市))

さそり座 $\zeta_1\zeta_2$ 。曾我兄弟にもとづく。(内田 1949)

・サイゴウボシ(西郷星)

大接近の火星が鹿児島の乱(西南戦争)に結びついた。火星の中に西郷隆盛がいると信じたことにもとづく。(野尻 1973)

・キリノボシ(桐野星)

大接近の火星と近づいたり遠ざかったりした土星。桐野利秋(西郷隆盛とともに西南戦争で戦い戦死)に

もとづく。(野尻 1973)

4-2. 都市部における星名伝承

星名伝承は、工業化の影響を受けにくかった地方、離島に伝えられており、都市部は天文民俗調査の対象ではないと誤解されがちである。しかし、次のように東京や大阪等の都市部においても生活のなかで形成されてきた星名伝承を記録することができる。

① 2014年の調査(北尾 2015)

・神奈川県横浜市神奈川区子安通

昔、穴子を取ったとき、オオボシ(明けの明星)で夜明けが近いことを知った。(話者生年、昭和14年)

・神奈川県横浜市鶴見区生麦

北斗七星について、「ナナツボシ、こうなって、柄杓、杓文字、こうなってるでしょ。ナナツボシと教わっただけどね。言い伝えて。七つある。どこから数えて七つだか。あれがナナツボシだ、と言って」と記録。

(話者生年、昭和9年)

② 2015年の調査

・大阪府堺市堺区大浜北町(話者生年、昭和10年)

・大阪府堺市堺区出島(話者生年、大正14年)

・大阪府高石市高師浜(話者生年、昭和22年)

・兵庫県明石市二見町西二見(話者生年、昭和15年)

・兵庫県加古郡播磨町古宮(話者生年、昭和17年)

4-3. 1980年代に実施した調査との比較

2015年についても新たな星名を記録することができた一方で、1980年代に実施した調査との比較を行なうと、カノープスの星名や徳蔵の伝承等について記録が困難になっている。兵庫県加古郡播磨町古宮の事例では、1984年に明治43年生まれの話者からミカンボシというカノープスの星名伝承を記録することができたが、2015年はオオボシ(明けの明星)だけであった。星を目標とする仕事の経験が明治生まれに比べて少なくなったことが原因であろう。

5. おわりに

昭和10年代、20年代生まれが星名伝承を伝え聞いており、少なくとも2020年代までは記録が可能ではないだろうか。2016年以降も引き続いて調査を続けたい。

参考文献

野尻抱影:1973, 日本星名辞典, 東京堂出版

内田武志:1949, 日本星座方言資料, 日本常民文化研究所

北尾浩一:2001, 星と生きる, ウインかもがわ

北尾浩一:2015, 大阪市立科学館研究報告第24号, 天文民俗調査報告(2014年), 大阪市立科学館, 57-58